広島大学教育開発国際協力研究センター『国際教育協力論集』第11巻 第2号（2008）163～173頁

ケニアにおける自発的なコミュニティ開発
―小学校女性教師の経験から―

高　柳　妙　子
（広島大学教育開発国際協力研究センター）

1．はじめに

ケニア共和国（以下、ケニア）における女性のコミュニティ開発への参加は、文化的、社会的要因から困難な状況にある。特に伝統的な社会を現代においても維持しているマサイのコミュニティでは、女生徒の結婚妊娠等による中途退学、一夫多妻制などにより、相対的に男性の社会的地位が高く、コミュニティの意志決定の場に女性が参加し自らの考えを述べ、その発言に影響力を持たせることは非常に難しい状況にある。これは、女子の教育へのアクセスにも影響する。こどもたちは、男女問わず家畜の世話や家事手伝いをすることが期待されているが、女子は、幼少の兄弟姉妹を含む家族の世話をすることも望まれている（Chege & Sifuna 2006）。さらに、女子は、伝統的に父から未来の夫への贈呈品とみなされ理想的な妻になれるよう育てられる。女子割礼（女性性器切除:FGM）の儀礼を通過すると、結婚可能な女性として扱われ、見合い結婚により、小学校を中途退学させられることがある。結婚時には、新郎家族から新婦家族へ婚資として牛などが贈られる（Spear & Waller 1993）。このように、女性の社会における役割は、文化的、伝統的、社会的に確立され、女性たち自身も、理想的な女性を、父あるいは夫につつましく従順的であるというイメージを抱く傾向にある。

昨今では、女性が社会開発に参加することに影響を及ぼす要因に関し多様な局面から分析され、FGM廃絶運動、女性の能力開発を支援しようとする教育や保健分野などの社会開発事業が展開されるようになってきている（Ministry of Gender and Children Affairs 2000; Ministry of Health 2007; UNFPA 2007）。そして、地域住民は、このような社会開発事業へ参加し、様々な活動経験を通して能力を構築していくことにより、それが最終的に、自助努力や自立発展につながると報告されている（田中ほか 2002; 江原ほか 2003; 佐藤ほか 2005）。

開発の過程において、女性グループの運営者あるいは女性の参加者と社会的地位向上について考察が行われていたが、女性教師の社会開発における役割、それと関連して、社会開発に参加する原動力と自発的な気付きから誘発した問題の意識化、彼女たちの社会開発における自立発展を遂げる過程について検証されたものは、限定的であった。

そこで、本稿では、コミュニティ開発活動に意欲的に取り組んでいるケニアナロック県におけるマサイのE女性教師（以下、E教師）を事例に、彼女のコミュニティ開発に対する原動力は何であるか、彼女がどのような立場で政府あるいはNGOと連携して社会変革を伝統社会に適応、促進させているか、どのような過程を経てエンパワーメントを達成しているかを考察する。まず、エンパワーメントの定義を整理し、続いて、E教師のライフヒストリーを通して、彼女の生い立ち、教育歴、職歴、参加しているコミュニティ開発活動について把握する。そして、女性教師のコミュニティ開発における役割を明らかにすることにより、自発的な気付きにより自立発展が達成される過程やコミュニティ参加を促進する

要因を模索することにより、それらが、どのようにコミュニティ開発に影響を及ぼしているのかを検証する。

2．エンパワーメントアプローチと自立発展

一般的にエンパワーメントの概念は、外部者により展開された開発事業というなかで論じられることが多い。例えば、フリードマン（1995, 9頁）によれば、エンパワーメントは社会的、政治的、心理的という3つの形態を取りながら世帯及びメンバーが力をつけていく過程であると説明し、「貧しい人々は制度的、組織的に力を剥奪されてきたために貧しいのだから、その力の源となる資源へのアクセス機会を得ることにより、力、とくに意思決定における自律性を獲得し、貧困からの脱出を図る」と述べている。そして貧しい人々からなるコミュニティは、「自然発生的に状況を改善する仕組みをつくることは稀であり、外からコミュニティに入ってきて、社会運動や社会事業を仕掛けたり、軌道に乗せる役割を演じるエージェントを必要とすることが多い。」と指摘している（Ibid.）。貧しい人々は、外部者に依存し外部からの働きかけによりはじめて、変革を起こすことができると信じられていた。Alsop et al. (2006, p.1) は、エンパワーメントを「自らの意思で目的と行動を選択し、それに伴って導き出された結果を受容することができるように、個人あるいは集団の能力を強化する過程である」と定義したうえで、そのエンパワーメントの過程をモニタリングする方法と達成度を評価するアンケート用紙例とならべて実践方法を提示している。

他方、発展途上国の開発において、経済開発のみならず社会開発、さらには人間開発が重要であるという議論がなされ、1980年代以降、チェンバースなどにより新たな開発のアプローチとして参加型開発が提唱された。加えて、途上国のNGOや女性フェミニスト研究者たちにより、草の根レベルの女性たちが連携し自助努力をつけることにより抑圧されている状況を変えていく、エンパワーメントアプローチが注目されるようになった。地元住民は、国際機関や援助団体、特に外部者による働きかけではなく、自分たちで連携して社会を変えていこうと行動できることが示唆されているのである。

チェンバース（1997, 2000）は、主体的参加型農村調査法（Participatory Rural Appraisal）によって力づけられた地域住民（貧しく弱い人達）が、地図や模型の作成などを通してコミュニティの状況とニーズを分析し、互いに助け合いながら自分たちの状況分析と調査の立案、モニタリング、評価、実施ができることを証明した。しかし、この調査法は、外部機関によって実施され、地域住民はファシリテイターとともに調査を行うことが計画されている。ここでも、外部者の役割が明確化され、外側からの働きかけによって住民の自己開発が促進されると示唆されている。

フレイレ（1970）は、被抑圧者自身が、自分たちの置かれた立場や自分たちを取り巻く社会を批判的に見ることにより、問題を意識化し、住民が連携して解決策を見つけ出し、それを実行して社会変革を興していく過程こそが、エンパワーメントであると述べた。また、モーザ（1996）もジェンダーと開発の観点から、エンパワーメントの目的を、「自立向上心によって女性が内なる力を身につけることを目的とする。」と述べている。これは、第一世界のフェミニスト研究者というよりも、草の根で開発事業を実践してきた経験に基因するものである。国、地域、民族、階級などにより、女性達の置かれている抑圧状況は異なるが、それぞれのレベルにおいて女性が積極的に開発の過程に参加することの必要性、またそのためには、女性たちが自らの手で自立心を育てることによって達成するこ

とができると考えられている。

さらに、西川・野田（2001, 19頁）は、開発[1]を、「社会や個人が、その本来のあり方や生き方に目覚め、自然および他の社会や個人との共生のために、苦からの解放をめざして、智慧と慈悲をもって自らの潜在能力を開花させ、人間性を発現していく、物心両面における内発的な実践」であると述べているが、エンパワーメントを自己開発の過程であると明示していると言えよう。

本稿では、エンパワーメントは当事者自らが、抑圧され不平等な状況に置かれている立場と、彼らを取り囲む地域社会の構造や慣習を批判的に視て、問題を意識化して変革を促していく自発的な能力開発の過程である、と位置づける。加えて、人々は、自己開発を目指しながらも地域発展に主体的に関わって行く力をつけることであると据え議論するものとする。

３．調査概要

(1)　調査地域の概要

今回の調査地は、ケニアリフトバレー地方ナロック県マオ郡である。ナロック県はマサイの居住地域である。彼らは、伝統的に遊牧民かつ狩猟者であり、牛、羊、やぎなどの家畜で生計を立てている。マー語（マサイ語）を母語とする。昨今では土地の私有化が図られ、人々は牧畜のほかに、とうもろこしや小麦などの穀物を栽培している。地元住民は、赤、青などカラフルな布を身体にまとい、首や腕を手作りのビーズアクセサリーで飾っている。一方で、携帯電話を所有している人々を頻繁に見かける。一夫多妻制の結婚形態が認められており、若い女性が年配の男性の２番目の妻として嫁ぐケースもある。新婦は、新居となる家を、土、牛糞と草などをまぜて木の枝の上に塗り固めたもので、自力で建てることが期待されている（Spear & Waller 1993）。筆者がＥ教師に同行して幼児がいる若い女性を訪問した時、その女性は自分で建てたという新居に案内してくれた。彼女は妻として、食事の準備、牛の乳搾り、水汲み、薪拾い、洗濯、子どもの世話など家事一切をこなしていると言っていた。他方、結婚相手や義理の家族によっては、現代風のコンクリートでできた家が用意され、そこに新居を構えることもある。地元マーケット近くに住む別の新婚女性は、自力で家を建てる必要がなかったこと、家事全般をこなしていること、また、「マサイの女性として、夫と口論するということは非常にいけないことであると育てられてきた、だから喧嘩をしたことはない。」と話していた[2]。

マサイの慣習の一つである割礼は、男子が一人前の男性（マサイの戦士であるモラン）になること、女子が、結婚できる大人の女性になる通過儀礼として行われている（Saitoti & Bechwith 1988）。高橋（2006, 275頁）の先行研究で、大多数の生徒がマサイであるというナロック県にある小学生女子3年から8年までの24名を対象に、女子割礼について、意識調査を行ったところ、賛成17人、反対5人、分らない2人という返答があったと報告されている。「割礼は危険であるから」という少数意見もあったが、賛成の理由として、「マサイの女性として１人前になるためには必要なものであるから」という意見が出ていたということである（ibid.）。同様に、一夫多妻制については、マサイの文化であるから、女子生徒の多くは喜んでその制度を受け入れるという結果も出ている。

他方、女子割礼と言われてきたこの慣習は、昨今、FGM（女性性器切除）とよばれ、子どもと女性の健康にとって有害で暴力性を持った慣習としてみなされ、FGM 廃絶運動が行われている[3]。調査地域においても国際ＮＧＯ ワールドビジョンや国連人口基金が FGM 廃絶事業を展開している。現在、ケニアでは、FGM は法律によって禁止されており、FGM を女子に強要すると、１年間の懲

役、また / あるいは 50,000 ケニアシリング（2008 年 7 月 30 日時点 80,350 円）の罰金が科せられる（No Peace Without Justice 2006）。

加えて、この地域の問題として、旱魃による水不足が挙げられる。E 教師宅において、偶然立ち寄った、地方政府のコミュニティ開発アシスタントとして働く女性ソーシャルワーカーへ地域の直面する問題について質問したところ、彼女はコミュニティ内の一番の問題は、水不足と女性の過重労働であると答えた。ちなみに、今回調査のためにホームステイした E 教師宅では、必要最低限の水をマーケットから購入していた。E 教師の元軍人である夫は、退職後農業を営んでいるが、2005 年は旱魃のためたった 5 袋の豆しか収穫がなかったということである[4]。

(2)　調査方法

2007 年 7 月 18 日から 21 日まで、E 教師宅に宿泊されていただきながら実施した。今回は、主に、ライフヒストリー法を用いた聞き取り調査と参与観察によるものである。ライフヒストリー法は、個人の生活を含む人生の記録であり、個人の生活を把握しつつ主観的な考え方を明らかにして、現在の活動がどのような過去を踏まえて展開されているのかを理解することである（谷 1996; Keeves 1997）。筆者は、調査の目的を E 教師に説明し、理解を得てインタビュー調査を開始したわけだが、E 教師は、調査期間中、非常に協力的であった。インタビュー場所は、E 教師宅、E 教師の赴任校、通勤時間中、コミュニティ訪問中、などである。言語は英語であり、テープレコーダーを使用せず、筆者の質問に対するE教師の返答をフィールドノートに書き取った。固有名称等は、E教師に確認した。今回E教師を選出した理由であるが、大阪大学と広島大学は、2000 年から共同研究でケニアナロック県における小学校調査を実施しており、その調査結果からすでに、コミュニティ開発に熱心に取り組んでいるE教師の存在が明らかになっていたからである[5]。また、筆者は、2006年11月に実施した事前調査において、E 教師と雑談を交わしており、E教師のコミュニティ開発活動に関してすでに興味を持っていたという点にもある。

しかし、4 日間の短期滞在では、E 教師の生活、活動の一部に触れることができただけにすぎない。また、遠方から来た「外国人」客をもてなしたいという心遣いから現状に多様の装飾がついていた可能性もある。時間的な制約から、事実確認を複数の人々にすることが困難であった。

最後にインタビューで収集したデータを、英語から日本語に翻訳し、研究目的に沿ってテーマ分析（Thematic Analysis）方法を用いて検討した（Taylor & Bogdan 1989, p.131）。今回は、テープレコーダーを使用し、E 教師の返答を忠実に記録していないため、データとしてナラティブ化して記述することを避けた。後述のとおり、彼女の生い立ち、教育歴、職歴、コミュニティ開発に対する原動力、コミュニティ活動、コミュニティの課題、関連諸機関との連携といったテーマに分類して分析した。

4．調査結果

E 教師は、マサイとして生まれ、育った、I 小学校の教師である。I小学校は、ナーサリーおよび1年生から3年生で構成される不完全学校である[6]。幹線道路から数キロメートルほど脇にそれて入った草原の中に位置する。彼女はI小学校の3年生担任である。1男5女の母親でもある。

(1)　E 教師の家族と生い立ち

E 教師は、ナロック県で 1955 年に生まれた。父親は 2 人の妻を持った。彼は、特に教育を受けていなかったが、政治活動に積極的に参加してきた過去がある。英国からの独立

表１　Ｅ教師の兄弟姉妹

第１夫人（2006年死亡、非就学）の子	第２夫人(非就学)の子
第１子　男　初等学校中退　農業	第１子　女　初等学校中退　主婦
第２子　男　教員養成校卒業 小学校教師（2007年退職）	第２子　男　初等学校中退　農業
第３子　女　小学校中退　主婦	第３子　男　中等学校修了　地方自治体勤務
第４子　女　教員養成校卒業　小学校教師 E教師	第４子　女　初等学校中退　主婦
第５子　女　小学校中退　主婦	第５子　男　初等学校中退　農業
	第６子　男　初等学校中退　農業
	第７子　女　中等学校修了　主婦

時には、その活発的な政治活動により、英国植民地政府に7年間（1954年～1961年）投獄された。獄中に読み、書きと大工技術を習得した。父親の第一夫人はＥ教師を含めて５人の子供、第二夫人には６人の子供がいる（表1）。どちらも教育を受けていない。Ｅ教師の母はすでに他界しており、父親は現在98歳で、第二夫人と住んでいる。父は、出所後、教育の重要性を感じ、こどもたちを学校へ通わせた。しかし、こどもたち全員が父と同じ教育に対する価値観を持っていたわけではなく、ほとんどが自ら中途退学してしまったということである。子供達が中途退学しそうなとき、両親は説得を試みたが、それを聞き入れず、結局そのまま退学してしまった。

(2)　Ｅ教師の教育歴と職歴

Ｅ教師は、ナロック県に位置する小学校を1968年に卒業後、1969年から1972年までナロック県にある中等学校に在籍し、修了した。そして、1973年から1974年まで、地方政府のゲームレンジャーという野生動物を保護する職に就いた。その後1974年から1975年までケニア農民組合（Kenya Farmers Association: KFA）の会計管理部に、1975年から1976年までは、ナクル市役所に勤務した。その間、22歳時に見合いにより10歳年上のマサイの男性（小学校6年間修了）と結婚した。市役所での事務仕事に魅力を感じなくなり、教師になることを決意し、２人の子供を義理の家族に預けてモンバサにある教員養成校へ入学した。長期休暇中は故郷へ帰省し家族と共に過ごすことができたので、特に問題なく学生生活を送った。1980年教員養成校を卒業し、Ｎ小学校に２年間、Ｒ小学校へ７年間、続いてＯ小学校に14年間奉職し、その後現職のＩ小学校へ2004年に異動した。Ｉ小学校へは、小規模な学校での教師生活を経験してみたかったという理由で異動願いを出して転任したということである。Ｅ教師の自宅は、地元マーケット付近にあるコンクリート作りの借家である。自宅からＩ小学校までは、乗合ワゴンバス（マタツ）と徒歩で1時間前後かけて通勤している。自宅前を通る幹線道路脇で、バスを1時間ほど待つこともしばしばである。時には、新切なトラック運転手が助手席や荷台に便乗させてくれることもある。

他方、2003年からナイロビ市にある東アフリカ・カウンセリング研究所において聖書

による心理学的カウンセリング・上級ディプロマコースを遠隔学習で履修しており、毎週土曜日はナイロビ市で講義を受講している[7]。コミュニティ開発活動に本格的に関わりたいと切望しており、55歳の定年退職を心待ちにしている。

(3) E教師のコミュニティ開発に対する原動力

彼女のコミュニティサービスに対する考えは、E教師の母親から影響を受けたものである。第一夫人であったE教師の母は、地域の困っている人々やホームレスを援助しており、自宅には常にそのような人々が出入りし、母親は寝食を提供していたということだ。母の姿を見て育ったE教師は、困難な境遇にいる人々を助けることはよいことであると常に考えていた。

E教師は、O小学校赴任時（1990年～2004年在職）から活発的にコミュニティサービスへ関わるようになった。O小学校へ赴任して2, 3年目、小学校卒業時の国家統一試験（KCPE）を受験する女子学生が1人もいなかったときがあり、大きな衝撃を受けた。O小学校赴任前のR小学校を思い出してみると、生徒達のなかには、小学校卒業後に中学校へ進学した者もいた。つまり親達の教育に対する理解がO小学校の位置するコミュニティより深かったと改めて気付いたのである。その衝撃を受けた年の翌年、O小学校では、7名の女子学生のうち、2名がKCPEを受験した。他5名は中途退学し結婚してしまった。これらの出来事をきっかけとし、なぜ女子教育が必要なのかを深く考えるようになった。そして、ワールドビジョンと協力して女子教育普及のための活動をするようになった。女子学生たちはFGMを受けた後に妊娠や、早期結婚により学校を中途退学されられてしまうという悪循環を何とか断ち切り、女子学生でもせめて小学校は修了させたいと考えるようになったのである。

(4) E教師のコミュニティ開発活動

① 国際NGOワールドビジョンのリソースパーソンとして

E教師は、14年間在職したO小学校において、ワールドビジョンによるチャイルドスポンサーシッププログラム（奨学金プログラム）が実施されていたことを知って以来、リソースパーソンとして、コミュニティとNGOのコーディネーター役を務めている。2007年7月時点において、ワールドビジョンは、チャイルドスポンサーシッププログラムより、FGM廃絶プログラム（2008年終了予定）を重点事業として実施している。E教師もFGMを経験しており、FGMは傷として体に残り、出産時にも障害となると話していた。彼女は、FGMが死をもたらす危険性があることも熟知している。E教師は、過去、50-100人の子供達（男子よりも女子が多い）を上記プログラムに登録し、小学校就学が継続できるよう支援してきたと、覚えている。

② 地元ラジオ局運営委員会のメンバーとして

訪問中に、隣町にある地元ラジオ局において、住民へのラジオ配布が実施された日があった。筆者とE教師はI小学校から徒歩と乗合ワゴンバスで駆けつけた。久しぶりに暑い日であったが、そのプログラムは昼食なしで11:30から16:00頃まで行われた。平日だったにも関わらず、地元住民の約70名が参加していた。

運営委員会は、牧師、コミュニティの指導者あるいはリーダー、E教師など14名で構成されている。この委員会が、寡婦、寡夫、貧困層の人々、周辺地域にある16の小学校長、ラジオ局に熱心にリクエストやメッセージを送るラジオファンなど100名を対象にした配布者名簿を作成した。英国系のNGO, Freeplay Foundationが、携帯電話会社2社からの助成金を基に、ラジオ配布事業を実施していた。ロンドンからインド系の英国人がプログラムコーディネーターとして参加し

ていた。他国でも同様の事業を行っているということだ。このNGOは、ケニア気象庁と協力してケニア国内の他地域でも配布事業を実施するということであった。ラジオ自体は、手動でハンドルを回しながら（ねじまき式）エネルギーを蓄積するため、乾電池を必要としない。

始めに、参加者は、ラジオ入手に係る必要な契約書について、NGO関係者からマー語（マサイ語）で説明を受けた。その後、名簿に沿って名前が呼ばれ、ラジオを受け取る際、英語で書かれた契約書（Guardian Agreement for Lifeline Radio）にペンで署名をした。非識字者の人たちは、親指にインクをつけて拇印をした。参加者たちは、ラジオ配布が完了した後、使用方法について説明を受け、全員で記念撮影をして解散となった。ラジオ配布日についての開催場所、時間等の連絡は、委員を通じて電話や口コミで配布日前日の午後に伝達されたため、すべての小学校長にうまく伝達されなかったためか、欠席者も見られた。

ラジオ局のディスクジョッキー（DJ）は、コミュニティ内から選出された若者4名で構成され、1週間の研修をナイロビで受講後、無給で働いていた（2007年7月時点）。DJおよび運営委員たちは、資金調達が成功すれば、将来的に給料が支払われることを、切望している。ラジオの放送時間は、朝6:30から8:30、夜19:00から21:00である。ラジオ番組はマー語で話され、HIV/AIDS、FGM、女子教育に関する啓発メッセージ、コミュニティ開発関連ワークショップ、マーチなどの案内とともに音楽が流されている。

(5)　女性の教育とコミュニティ開発－E教師の観点から

E教師は、「無知」が、女性の一番の問題であると考えている。仮に、裕福な家庭であったとしても、ある程度の知識が備わっていなければ、マネジメント能力がないため、物事を計画的に実行していくことができないと考える。例えば、マネジメント能力や計画性があれば、旱魃が予想される場合、予め、家畜を市場で売りさばいておくという手段も考えられる。さらに、女性達は、マネジメント能力の欠如に加えて貧困に関する理解不足、そして、エンパワーメントが乏しいと考えている。教育を受けていない母親たちの娘たちも、母親と同じように教育の恩恵を受けることなく同じ人生を歩むことになると懸念している。男性は社会を変えることはできないが、社会開発は女性によってもたらされると信じている。E教師は、教育は、財産の一部であるとも信じている。E教師は、家庭内で、女子教育に母親の果たす役割は大きいと信じ、今後も、女子教育と女性が自立発展していく過程を見守りたいと願っている。

(6)　コミュニティ開発活動上の関係諸機関との連携

前述した地元政府のソーシャルワーカーやNGO関係者とのコミュニティ開発活動を連携して実施するほかに、早婚による中途退学を阻止させるために、県教育局に嘆願状を送るなどもしている。E教師は、コミュニティ開発問題において、それらを改善するための事業を展開している関連機関とよく情報交換や意見交換をしている。お互いに意見を出し合い、相談するができるので、日頃から諸機関と協力して活動するのがよいと考えている。

(7)　E教師のある1日

ここでは、E教師の平日の1日について、紹介したい。

まず、朝4:00から5:00の間に起床し、自宅を出発するまでの間に部屋の掃除を済ませる。沸騰した湯と水をバケツに入れて温度を加減した湯で体を洗い、家族への朝食を準備して、自分も朝食をとる。紅茶と食パンあるいはチャパティ（全粒粉と水を捏ねた生地を

発酵させずに薄い円形にのばしてクレープのように焼いたもの）の朝食をとる。7:20頃自宅を出発し、幹線道路脇まで歩いて乗合ワゴンバスを待つ。その日は、乗合ワゴンバスが満席で乗れなかったため、通りがかりのトラックに乗せてもらい学校へ向かった。勤務校近くの幹線道路脇で降ろしてもらい、そこからI小学校まで25分前後歩く。

8:05にI小学校に到着する。校舎前で生徒たちを集めて、全校集会を行う。その後12:50まで途中に休憩時間を1回挟んで授業を数時間行う。この休憩時間は、教師たちのお茶の時間であり、紅茶とビスケットを食べ、雑談をする。I小学校に雇われている女性コックが、紅茶を作り教職員室へ運んでくる。生徒たちは、午前中の授業が終わると、学校で用意されたコックが作った昼食を食べるが、教師は食べない。13:30から14:00ごろ、生徒たちの昼食が終了後、教師は、校舎の戸締りをし、鍵をかけて、学校を出発する。E教師は、朝と同じ通勤経路で帰宅する。帰宅後は、家事、訪問客と会談、知人宅を訪問、自主学習、コミュニティ開発活動等に費やす。夜はランプに明かりをともし、夕飯の支度をする。家族と夕飯、団らん後に就寝する。E教師は、月、水、金曜日の午後をコミュニティ開発活動に充てる曜日とし、火、木曜日の午後を自主勉強の時間に充てるよう計画している。

5．考察

(1) E教師のコミュニティ開発への原動力はどこから来るのか、また、彼女の自立発展して行く過程はどのようなものか

E教師自身が教育を受ける過程において学校教育の影響によりコミュニティの状況を批判的に見るようになり問題に気付き始めたというよりは、彼女の母親の影響によるものであったことが明確になった。物心がついた時から、母親が困っている人々を世話する姿を見て育ち、「困難な状況にいる人々を助けることは良いことであり当たり前のこと。」として、彼女の中に意識付けされた。次に、教師としての経験が蓄積された頃、自分が教えた女子生徒達が、KCPE受験を志願せず初等教育で終了してしまったことや、結婚のために中途退学した女子生徒の存在が、E教師に大きな影響を与えた。この一連の出来事が「気付き」となり、女子生徒の教育を阻害する文化的、社会的、経済的な要因を見つけ、解決策を模索していくようになった。

フリードマン（1995, 129頁）は、エンパワーメントが外部から与えられることが多く、「生徒に教師が必要であるように、自己エンパワーメントが自然発生的に起こることはまずない」と指摘している。とすれば、E教師のエンパワーメント達成の過程は、逆説的とでも言えるのではないか？外部機関の介入によるコミュニティ開発事業への参加をきっかけとして外部者に頼りつつ、自己開発していったというものではなく、自らが問題に気付き、解決の糸口を探求すべく行動していったのである。これは、「自発的なエンパワーメント」の過程を経ているということができる。もちろん、E教師が自ら動き始めた頃、周囲にはすでに教育事業を実施しているNGOや、FGM 廃絶運動を行っている国連機関の存在があり、有用な知識を獲得できる機会また彼らと協力できる環境がすでにあったのは事実である。しかし、それらの機会を実際に利用し何かに活かそうと選択するのは、E教師次第であり、彼女はそれを効果的に使い、また自立発展も達成されていったのである。

(2) マサイの女性教師の社会開発における役割は何か

高等教育を受けた「教師」という立場から社会開発の一環であるFGM問題への取り組みに関する役割を考えると、それは、外部の

NGOとの接点を持ち、情報収集をしながら自らも子供の権利や法律を学び、伝統社会への意識変化を促そうとしている点である。E教師は、法律家補助員（パラリーガル）の資格を活かし、親たちに、子供の権利と法律、罰則の側面から説明している。同じマサイのFGMを経験した女性として、小学校高学年や思春期の女子たちは、FGMや結婚を親やコミュニティから強要させられそうになると、E教師の所へ相談に来る。そして、E教師は、彼女たちの親、家族と、学校教育、NGO等の仲介役として役割を果たすために、まず、家庭訪問をして親達を説得し、一方で女子達が初等教育を続けることができるよう、NGOへ協力を求めに行く。加えて、コミュニティ内へのFGM廃絶を促す啓発活動として、コミュニティ内の女性たちを集め、ミーティングを開き、キャンペーン活動を実施している。情報をどのような経路で流し、啓発活動や人々の生活慣習をよい方向へ変化させて行くかという点においては、やはり地域の有力者や影響力を持った人々の協力が必要となってくるが、地域でのコミュニケーションチャンネルと情報の普及過程を予め知り、それを利用して時間をかけつつコミュニティにメッセージを送っている。昨今では、FGM経験のある母親層から、自分と同じ辛く痛い思いを娘達にさせたくないという言葉も発せられるようになるなど人々もその問題について話し始めるようになってきた。コミュニティ内では、E教師がFGMや就学問題について活動していることが広く認知されており、様々な層の相談者が彼女の元に相談に来るということである。ここで「教師」という職から社会開発において担えるだろう役割を考えるとき、E教師が話していたことで深く印象に残っている点がある。それは、昨今では辺境地域にも学校が建ち始め、様々な問題を抱えつつも教師たちがそういった辺境地域にも配属されるようになってきた。そういった辺境地域において外部との接触を持ち、情報伝達の役割を担うことができるのは、やはり教師である。その地域社会を改善するためにコミュニティサービスへ従事するまでは行かないにしても、情報伝達の役目を担うことはできるのではないかと考える。

(3)　社会変革をどのように伝統社会に適応、促進させているか

教師個人の人生経験と深く関係していると言えるが、彼女自身がマサイの出身であり、内部者として伝統社会を熟知している点が非常に大きな利点であると言える。伝統社会の中で生まれ育ち、彼女自身もFGMを経験し、そのための精神的、身体的障害を持ちつつも出産も経験している。部外者のように、ただ一方的に伝統社会の慣習を批判し、変化させようとしているのではなく、経験者としての立場に立ち、さらに自らもコミュニティ開発やジェンダーと教育問題の知識を習得している。そして、コミュニティ内の影響力のあるリーダーたちや、外部NGO、教会関係者、政府機関のソーシャルワーカーと常に連絡をとりながら、情報交換をし、お互いに協力し合いつつ、様々なアプローチで促進させようと努めている。さらに言えば、コミュニティ内での社会変革の普及は、どのような過程を辿るのか、どういった情報をどのような方法で伝授すべきか、その伝授すべきキーパーソンは誰になるのかを把握し、過程を重要視している。また、FGM問題が法律化され、彼女自身も、法律家補助員の資格を取得し、説得力のあるアプローチをしている。E教師は、コミュニティ住民の意識を急に変え、また、無理に価値観を変化させようというものではなく、昨今の世界情勢、地域社会の課題、それに対する取り組み方や解決方法を情報として地域住民と共有することが重要だと考えている。さらに、それらの情報を促す啓発活動を通して、最終的に住民たちが行動変化や意識改革を起こすかどうかという点は、各個人の判断にゆだねることが大切であ

るとしている。住民たちも人生経験のある成人であって、児童達に情報を詰め込み、従わせるというようなことではないというのが、最も大きな違いで重要な点である。

６．おわりに

本稿では、ケニアにおいてコミュニティ開発活動に従事するマサイの女性教師のライフヒストリーから、教師としてのコミュニティ開発における役割を明らかにした上で、彼女の自立発展性が達成される過程を考察した。また、女性の教育とコミュニティ開発の関連性についてＥ教師の観点から検討した。ここでは、エンパワーメントの概念を外部からの働きかけによりファシリテイターとともに、コミュニティ開発の活動に参加しながら力をつけていく過程ではなく、本人自身が、社会問題に自発的に気付き、その気付きを意識化することにより現状を変革していこうと学びながら行動して行く自己開発の過程であるとした。Ｅ教師の場合もまた、女子生徒が早婚により中途退学し、初等教育を修了すると同時に学ぶ意欲を断ち切ってしまうという現状に疑問を持ち、自分自身で解決可能な範囲でこの状況を改善しようと行動に移した。そして、コミュニティの伝統や状況をよく知る内部者としての利点を活かし、自らもまた学びながら他機関と連携して伝統社会に意識変化を促そうとしている。今回の事例から地元住民が、外部者の助けを借りて、単に力づけられ自立していったという結果のみに注目するのではなくその過程を丹念に観察していくことは重要だと言える。

さまざまな問題を抱えつつ貧困に苦しむ人々は、外部からの働きかけがないと能力開発にまで至らないとする仮説を再考する必要があることを明らかにした。人々は、自発的な気付きから誘発した問題意識を持てばお互いに協力しながら生活向上、状況改善のために行動することができるということが再認識された。さらに、問題意識が自発的に発生すれば、自立向上心を持って自ら学びつつ能力開発を行っていくことは言うまでもない。最後に、こういった伝統社会の中における教師、しいて言えば、教育のコミュニティ開発における役割、コミュニティの望む教育、またこどもたちの理想とする教育はいったいどのようなものであるか、今後も地域住民と対話を重ねながらさらに研究を進めて行く必要があると考える。そして、自発的な開発に繋がる教育を求め、探求していきたい。

謝辞

本調査実施にあたっては、科学研究費補助金（基盤研究Ａ,平成17～20年度）「アフリカ地域の社会と教育に関する比較研究－フィールドワークによる新たな展開－」（研究代表者：澤村信英）の一部を使用した。ここに記して感謝したい。

注

(1) 仏教用語において、開発（かいほつ）は、従来使われてきた開発（かいはつ）とは、意味が異なり、「内から／内発的に・自律的に、自然に」という意味合いを持ち、この「潜在能力である仏性を仏教の実践を通じて開花させていくこと」であるとしている（西川・野田 2001, 18 頁）。

(2) この女性はカレッジ修了。彼女の夫は、同県の中等学校の教師であり、単身赴任しているが、毎週末に帰省するということである。

(3) 女子割礼あるいはＦＧＭは、調査地において「カット(Cut)」と言われることがある。

(4) 実際に量ったわけではないが、日本国内で米30キログラムが入る１袋の大きさほどである。

(5) ケニア・ナロック県におけるライフヒストリー法を用いた教育開発研究には、加藤(2006)、澤村(2005)などの成果がある。本稿の端緒となるアイディアは、内海成治教授(大阪大学)と澤村信英教授(広島大学)との議論において醸成されたものである。

(6) ケニアの初等教育は8年間である。ナロック県マオ郡には15の小学校が存在し(2006年10月時点)、そのうち8年生までである完全小学校は9校で、不完全小学校は6校であると報告されている(内海ほか 2006, 29頁)。

(7) E教師はクリスチャンである。

参考文献

内海成治・澤村信英・高橋真央・浅野円香（2006）「ケニアの「小さい学校」の意味ーマサイランドにおける不完全学校の就学実態ー」『国際教育協力論集』9巻2号，27-36頁.

江原裕美編（2003）『内発的発展と教育ー人間主体の社会変革とNGOの地平』新評論.

加藤貴子（2006）「ケニアの女子教育に関する一考察ーマサイの女性教師のライフヒストリーを通してー」『ボランティア人間科学紀要』7号，95-108頁.

佐藤寛編（2005）『援助とエンパワーメント能力開発と社会環境変化の組み合わせー』アジア経済研究所.

澤村信英（2005）「ケニア小学校のライフヒストリーから学ぶー教育開発の新たな知を構築する試みー」『国際協力教育論集』8巻2号，89-96頁.

高橋真央（2006）「ケニアー伝統社会における近代的学校教育の意味ー」澤村信英編『アフリカの開発と教育ー人間の安全保障をめざす国際教育協力ー』明石書店，296-288頁.

田中由美子・大沢真理・伊藤るり編（2002）『開発とジェンダーーエンパワーメントの国際協力』国際協力出版会.

谷　富夫（1996）『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社.

チェンバース、ロバート（2000）『参加型開発と国際協力ー変わるのはわたしたち』野田直人・白鳥清志監訳，明石書店.

西川潤・野田真里編（2001）『仏教・開発（かいほつ）・NGOータイ開発僧（かいほつそう）に学ぶ共生の智慧』新評論.

フリードマン、ジョン（1995）『市民・政府・NGOー「力の剝奪」からエンパワーメントへ』斉藤千宏・雨森孝悦監訳，新評論.

モーザ、キャロライン（1996）『ジェンダー・開発・NGOー私たち自身のエンパワーメント』久保田賢一・久保田真弓訳，新評論.

Alsop, R., Bertelson, F. M. & Holland, J. (2006). *Empowerment in Practice- From Analysis to Implementation*. Washington, D.C.: The World Bank.

Chambers, R. (1997). *Whose Reality Counts? Putting the first last*. London: Intermediate Technology Publications.

Chege, F. N. & Sifuna, D. N. (2006). *Girls' and Women's Education in Kenya*. Nairobi: UNESCO.

Freire, P. (1970). *Pedagogy of the Oppressed*. New York: Continum.

UNFPA (2007). A Holistic Approach to the Abandonment of Female Genital Mutilation/Cutting. New York: UNFPA.

Keeves, J. P. (Ed.) (1997). *Educational Research, Methodology and Measurement: An International Handbook, 2nd ed.* London: Pergamon.

Ministry of Gender and Children Affairs (2000). National Gender and Development Policy. [http://www.culture.go.ke/images/stories/pdf/genderpolicy.pdf] (July 1, 2008).

Ministry of Health (2007). Linking Communities with the Health System: The Kenya Essential Package for Health at Level 1- A Manual for Training Community Health Extension Workers. [http://www.hsrs.health.go.ke/publications.htm] (July 1, 2008).

No Peace Without Justice (2006). FGM legislation for 25 African countries. [http://www.npwj.org/npwj_topics/stop_fgm/2006/03/15fgm_legislation_for_25_african_countries] (October 15, 2007).

Saitoti, T. O. & Bechwith, C. (1988). *Maasai*. London: Elm Tree Books.

Spear, T. & Waller, R. (1993). *Being Maasai*. London: James Currey Ltd.

Taylor, S. J. & Bogdan, R. (1984). *Introduction to qualitative research methods: The search for meanings*. New York: John Wiley & Sons.